山村留学生の心理的特性

Psychological Features of the Children Attending to a Rural-Experience-Program

山下稔哉[1)]、仲程　誠[2)]、佐古三代治[2)]、林　　隆[3)]
Toshiya Yamashita, Makoto Nakahodo, Miyoji Sako, Takashi Hayashi

Abstract

Psychological features of the children, moved to rural area from urban habitat to attend an rural-experience-program was studied. Using Birleson Depression Self-Rating Scale for Children and Self-Competence Scale for Children, it was shown that the proportion of children with low self-evaluation and high depressive tendency in the subject group was higher than the proportion formerly reported on the average children group. Developmental imbalance measured by WISC-Ⅲ was suggested to be one of the causal factors. Importance of understanding children from psychological and developmental viewpoint was discussed.

要約

都市部から農山村に移住して様々な生活体験をする山村留学に参加した子どもの心理的特性について検討した。Birleson自己記入式抑うつ評価尺度と児童用コンピテンス尺度を用い、対象とした山村留学生集団には、自己評価が低く抑うつ度が高い子どもが平均的なレベルより多く含まれることを示した。WISC‐Ⅲの結果から、背景に発達的な偏りがある可能性が示唆された。山村留学においても、心理・発達的視点を取り入れた子どもの理解が必要であると考えられた。

Key words : rural-experience-program,depression,self-evaluation,development of children
キーワード：山村留学，抑うつ，自己評価，子どもの発達

昭和51年度に長野県八坂村（現大町市）で始まった山村留学は、30年後の平成17年度には全国155市町村で実施されるまでに広がり、山村留学に関わった小・中学校は全国285校、参加延べ人数は13,288人にのぼっている（財団法人育てる会，2006）。この間、中央教育審議会（1998）が心の教育を強調するなかで山村留学をとりあげ、『都市部の子どもたちが親元を離れ、山村など自然環境の豊かな地域で暮らしながら、その地の学校に通学したり、自然体験や勤労体験など様々な体験活動をしたりする「山村留学」は意義あるものと考える』として、その役割を高く評価した。

現代社会は都市化・高度情報化が急速に進み、携帯電話、テレビゲーム、インターネットなどのバーチャルなメディアが普及する一方、子どもの成長を支えてきた地域共同体の親密な人間関係は失われつつある。子どもが自然豊かな環境のなかで暮らし、異年齢集団にもまれながら多彩な経験をすることができる山村留学は、現代社会が失いがちな豊かな自然体験、リアリティーのある体験、親密な対人関係などを提供することで子どもの心の成長を促す取り組みとして、その役割がますます重要になっている。このような経緯から、都市部の子どもやその保護者が山村留学を希望する理由として、子どもの場合は「自然体験」を、保護者の場合は「自然体験」とともに「子どもが内面的に成長することへの期待」をあげることが多い（川前・玉井，1997、玉井・川前，1998）。

しかしながら、別の重要な動機として、地元で不登校やいじめなどを経験して何らかの心理的な課題を抱えた子どもが山村留学を希望するケースを見過ごすことはできない。こうした子どもに対して、山村留学の落ち着いた環境や安定した人間関係が保護的に働き、例えば、都市部の学校では不登校だった子どもが山村留学先では学校に通うようになるといった事例が少なからず認められることは、山村留学の現場ではよく知

1) 山口県立大学大学院健康福祉学研究科博士後期課程
2) 岩国市本郷山村留学センター
3) 山口県立大学大学院健康福祉学研究科

られている。川前（1998）は、今後このようなケースが増えていく可能性が高いことを指摘し、「内的な課題を持つ子どもが留学する場合の対応の確立が強く望まれる」ことを強調している。さらに平成21年度に山口県で行われた山村留学ネットワーク研修会では、ADHDや高機能自閉症など発達面に偏りを持つ子どもが山村留学するケースが全国的に増える傾向にある一方、このような子どもたちに適切なサポートを提供するための知識・情報・人材が不足していることが報告された。

文部科学省（2002）は、何らかの特別な配慮が必要な児童が通常学級に在籍する割合を6.3%と報告している。今日、子ども集団のなかに心理･発達的な課題を持つ子どもが存在するのは特別なことではなく、子どもに関わる立場にある大人には、そうした子どもたちの特性を理解し、適切な支援を提供することが求められている。この点は、山村留学も例外ではないと考えられる。

以上のような歴史的・社会的状況を背景に、山村留学において、従来の「自然体験」や「内面的成長」を目的とする子どもたちに加えて、心理･発達的な課題を持つ子どもが留学するケースは増えていると想定される。しかし、その実態は明らかではない。多様な特性をもつ子どもたちに山村留学を通してよりよい体験をしてもらうためには、子どもの特性を理解することが欠かせないと考えられる。そこで、山村留学生の特性を、主として心理的側面から明らかにすることを目的として、本研究を行った。

図１　上：岩国市本郷山村留学センター（中央の横長の建物）　下：山村留学の集団生活（1日の出来事を振り返る就寝前の集い）

Ⅰ．対象

山口県岩国市本郷で行われている山村留学に200X年に参加した小学3年生から中学3年生までの児童・生徒16名（男子12名、女子4名）を対象にした。

岩国市本郷の山村留学

岩国市本郷（旧本郷村）は、広島県と境を接する山口県の北東部に位置する。人口はおよそ1300人。中国山地の懐に抱かれた典型的な日本の里山景観を残す地域である。

本郷の山村留学は旧本郷村の公的事業として昭和62年度に始まり、平成18年の市町村合併以降は岩国市の公的事業に引き継がれて行われている。初年度から20年以上にわたって毎年20人前後の子どもを全国から受け入れており、その取り組みの継続性と提供する体験の質の高さが全国的に評価されている（山下他, 2007）。子どもたちは本郷集落の中心部にある山村留学センターに寄宿して、寝食をともにしながら集団生活をする（図１）。山村留学センターでは､所長､次長､指導員（2名）の計4名が､交代しながら24時間体制で、日常生活、遊び、学習、体験活動など、子どもたちの生活全般の指導・サポートを行っている。毎日の生活は規則的で、起床、就寝、食事、学習などの時間が明確に定められている。掃除、洗濯、食事の配膳など基本的な身の回りのことは子どもたちが行う。学校は留学センターから徒歩5分ほどのところにある岩国市立本郷小・中学校に通う。本郷小学校の教諭は、宿直を担当する形で山村留学センターの運営に関わっている。

Ⅱ．方法

200X年度の山村留学が始まってから1ヵ月が経過した5月に、留学生16名に対して以下の検査を実施し、

子どもの抑うつ傾向、自己評価、知的発達のバランスを把握した。

1. 抑うつ傾向

Birleson自己記入式抑うつ評価尺度（Birleson Depression Self-Rating Scale for Children村田1996、以下DSRS-C）を用いた。これは18項目からなる3件法の質問紙検査で、子どもが自分で記入する。抑うつの程度を把握し、子どもの心理的健康度を評価することを目的として、子ども全員に一斉に実施した。抑うつ傾向に影響を与える要因を検討するため、抑うつ傾向と自己評価の下位尺度間の相関係数を求めた。統計ソフトはExcel2003（CORREL関数）を用いた。

2. 自己評価

児童用コンピテンス尺度（桜井，1992）を用いた。これは学習、運動、友だち関係、自己価値の四領域（下位尺度：各10項目、4件法）で子どもの自己評価を把握する質問紙検査で、子どもが自分で記入する。自己価値は、「自分に、自信がありますか」、「自分には、あまりいいところがないと思いますか」といった質問項目からなり、ほぼ自尊感情に対応するものとされる。自己評価を多面的に把握することで子どもの心理状態を理解することを目的に、子ども全員に一斉に実施し

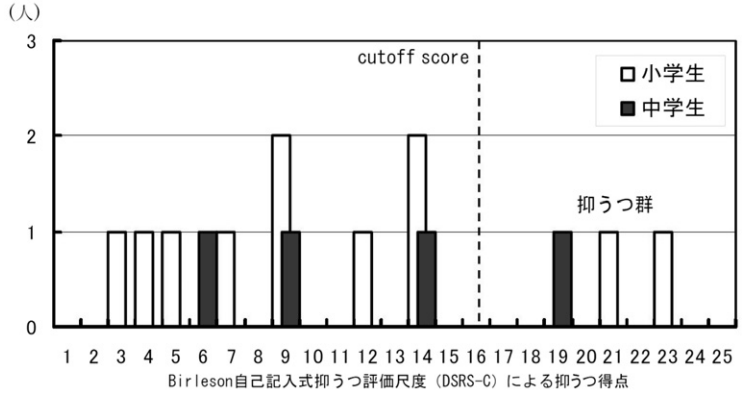

図２　山村留学生の抑うつ傾向

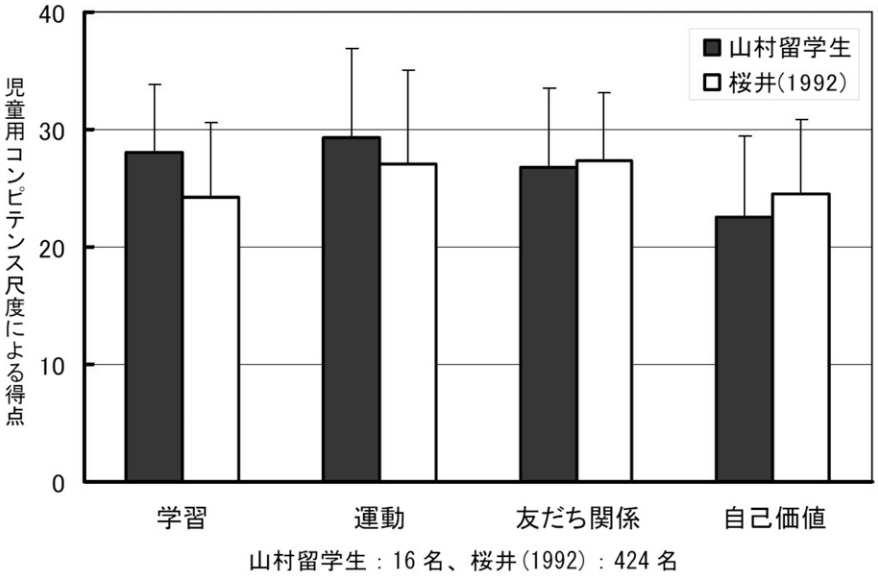

図３　山村留学生の自己評価

表１　児童用コンピテンス尺度によって把握した山村留学生の自己評価における下位尺度間の内部相関係数と下位尺度と抑うつ傾向の相関係数

おける下位尺度間の内部相関係数と下位尺度と抑うつ傾向の相関係数

	学習	運動	友だち関係	抑うつ傾向
学習				−0.36
運動	0.62**			−0.35
友だち関係	0.51*	0.42		−0.40
自己価値	0.57*	0.59*	0.53*	−0.67**

**p＜0.01，*p＜0.05（N=16）

た。自己評価の構造を把握するために、下位尺度間の内部相関係数を求めた。統計ソフトはExcel2003（CORREL関数）を用いた。

3. 知的発達のバランス

WISC-Ⅲを用い、子ども1人1人に対して個別に実施した。

4. 倫理的配慮

調査研究にあたっては、対象児と保護者にその主旨と目的について口頭で説明し、理解と同意を得た。

Ⅲ．結果

1. 抑うつ傾向

図2にDSRS-Cによる山村留学生の抑うつ得点を示す。平均値は11.43±6.02で、従来報告されている小・中学生の平均値9.02±5.81（傳田他, 2004）より高かった。16名中3名（小5女子、小6男子、中1女子）は抑うつ得点がcutoff score（16点）を超えており、抑うつ群と判断した。山村留学生全体に占める抑うつ群の割合は18.8％で、従来報告されている割合13.0％（傳田他, 2004）より高かった。

2. 自己評価

図3に児童用コンピテンス尺度による山村留学生（小学3年生～中学6年生）の自己評価の平均値と、従来報告されている小学5･6年生の自己評価の平均値（桜井, 1992）を示す。学習の自己評価は、山村留学生28.0±5.76、桜井（1992）24.28±6.28、運動の自己評価は山村留学生29.31±7.57、桜井（1992）27.05±8.07で、学習・運動とも山村留学生が桜井（1992）の結果を上回った。友だち関係の自己評価は、山村留学生26.75±6.75、桜井（1992）27.30±5.75で、ほぼ同レベルであった。これに対して、自己価値に関する自己評価は山村留学生22.5±6.90、桜井（1992）24.44±6.34で、山村留学生が桜井（1992）を下回った。全体として山村留学生では、学習・運動・友だち関係の自己評価が平均レベルかそれ以上であっても、自己価値に関する自己評価は平均的なレベルを下回る傾向を認めた。この傾向は、対象とした山村留学生のうち小学5･6年生（10名）のみについて検討しても同様であった。

表1に自己評価の下位尺度間の内部相関係数と、下位尺度と抑うつ傾向の相関係数を示す。下位尺度間では、学習 - 運動（r=0.62）で1%水準、学習 - 友達関係（r=0.51）、学習 - 自己価値（r=0.57）、運動 - 自己価値（r=0.59）、友だち関係 - 自己価値（r=0.53）でいずれも5%水準の有意な正の相関を認めた。下位尺度と抑うつ傾向の間では、自己価値 - 抑うつ傾向（r=－0.67）で1%水準の有意な負の相関を認めた。

3. 知的発達のバランス

WISC-Ⅲによって評価した山村留学生の全検査IQは平均103.88（88-117）で知的な問題を有する子どもは認めなかった。知的発達のバランスについては、言語性IQと動作性IQの間に5%水準で有意差のある子どもが4名（言語性優位2名、動作性優位2名）、15%水準で有意差のある子どもが4名（言語性優位1名、動作性優位3名）いた。言語性IQと動作性IQの間に15％水準で有意差のある子ども4名のうち3名（言語性優位1名、動作性優位2名）は、DSRS-Cによる評価でcutoff score（16点）を超えており抑うつ群と判断した。言

語性IQと動作性IQの間に5%水準で有意差のある子どもには、cutoff scoreを超える抑うつ傾向を認めなかった。

Ⅳ．考察

1. 抑うつ傾向

本研究の対象とした山村留学生集団においては、DSRS-Cによって評価される抑うつ得点の平均値と、cutoff scoreを超える抑うつ群の割合が、いずれも傳田他（2004）によって報告されている同年齢集団の平均的なレベルを上回っていた。本山村留学生集団には、なんらかの理由で抑うつ度が高くなっている子どもが、平均的な同年齢集団より多く含まれていることになる。

抑うつの環境因であるストレッサーに着目した場合、山村留学を始めたこと自体が、生活に大きな変化を生じたという意味ではストレスフル・ライフ・イベント（Holmes,T.H. & Rahe,R.H., 1967）なので、子どもにとってのストレッサーと考えることが出来る。一方、Lazarus & Folkman（1984）は、生活に大きな変化を引き起こすが稀にしか体験されないストレッサーよりも、繰り返し反復して経験される日常的な苛立ちの方が個人のストレス・レベルを的確に反映すると指摘していることから、山村留学生の抑うつ度が高い理由を厳密に明らかにするには、山村留学を始める以前の子どもの日常的生活がどのような状況にあったかについても、十分に把握する必要があると考えた。

佐藤・新井（2003）は小学4-6年生602人を対象に本研究と同じ抑うつ評価尺度（DSRS-C）を用いて検討を行い、学校現場で日常的に経験される『友だちとの関係』と『学業』に関するストレッサーが、児童の抑うつ症状に影響を与えることを見出している。山村留学生のなかにも、留学する以前に所属していた学校で『友だちとの関係』や『学業』に困難を感じながら適切なサポートが得られず、抑うつ度が高くなった子どもが含まれている可能性がある。このような子どもにとって山村留学が意義深いものになるためには、自然体験をするだけでなく、子どもの心理・発達的な特性を踏まえたうえで、『友だちとの関係』が円滑に行えるようなサポートや、『学業』面で“成功”体験を積み重ねられるような支援を提供する必要があると考えた。

一方、藤森他（1998）は、ネガティブなライフイベントを経験しても、家族の凝集性が高ければ子どもの抑うつ度は低いレベルにとどまることを見出している。夫婦間の葛藤が子どもの精神症状と関連することは広く知られており（Emery & O’Leary, 1982）、なかでも母親の抑うつが子どもの抑うつの大きな原因となることが指摘されている（菅原, 1997）。近年は女性の社会的地位が向上して職場進出が増えるとともに、離婚などによる一人親家族が増加しており、母親が仕事も子育ても1人で担うなかで大きなストレスに曝されるケースが少なくない。抑うつ度が高い状態で山村留学する子どもの生活背景に、このような家族や母親が抱えるストレスが存在する可能性がある。このような場合、山村留学を通した子どもの成長と関連付けながら、保護者どうしの交流や情報交換の場を設ける、保護者の相談に応じる等、家族メンバー、特に母親が抱えるストレスを緩和する取り組みが重要だと考えた。

2. 自己評価

学習、運動、友だち関係、自己価値の4領域（下位尺度）での山村学生の自己評価は、学習と運動でそれぞれ従来報告されている小学5･6年生の平均的なレベル（桜井, 1992）を上回った。ただし、運動 - 学習の間に1%水準の有意な相関関係が認められることから、山村留学生においては、『学習が出来る子どもは運動もできる』、『学習が出来ない子どもは運動も出来ない』という二極化が生じており、学習と運動それぞれの自己評価の平均値には学習と運動の双方が出来る子どもの自己評価が強く反映されているものと考えた。友だち関係の自己評価は、ほぼ平均的なレベルであった。これに対して自己価値に関する山村留学生の自己評価は、平均的なレベルと比べて目立って低い点が特徴的であった。学習、運動、友だち関係の自己評価が平均的かそれ以上のレベルにあるにも関わらず、自己価値に関する山村留学生の自己評価が平均的なレベルを下回ることから、学習、運動、友だち関係以外のなんらかの別の要因が作用することで、山村留学生の自己価値が低くなっている可能性が示唆される。児童用コンピテンス尺度における自己価値は、「ほぼ自尊感情に対応するもの」(桜井, 1992)とされている。遠藤(1999)は「自尊感情は自分による自己の評価である」とする古典的定義（James, 1980）を踏まえながらも、他者から『そのような者』として認められることが自分自身を『そのような者』ととらえる傾向を生み出す点を重視し、「自尊感情は他者との関係性の中で起きる社会的過程である」と指摘している。中山･田中（2007）は小学校4-6年生212人を対象に検討を行い、自尊感情

が他者の評価を基盤に形成されることを示すとともに、「その時々で異なる他者の反応を受けることで、子どもの自尊感情が揺るぎやすいものになっている」と指摘している。本研究の対象とした山村留学生の中にも、他者からの十分な評価が与えられないことで自尊感情が育っていなかったり、様々な大人から異なる評価を与えられることで自尊感情が混乱したりしている子どもが含まれている可能性がある。

全ての子どもが優れた特質に恵まれているわけではないが、東（1994）は「適応的な生き方は、いかに多くのポジティブな属性を持っているかという個人のレベルによっては規定されず、むしろ場や関係性の中で生じてくる、自分に適切だとされる行動を行うことと関わっている」と指摘し、優れた特質を持つことよりも周囲と適切な関係を結ぶことの大切さを強調している。山村留学においても、集団で生活する経験を通して1人1人の子どもが自分に合った役割や得意なことを発見できるようサポートし、周囲がその点を十分に評価するよう心がけることが、山村留学を通して子どもの自尊感情が回復し育まれるうえで重要であると考えた。

今回対象とした山村留学生では自己価値（ほぼ自尊感情に対応する）と抑うつ傾向の間に1％水準で有意な相関を認めたことから、自尊感情を低下させている子どもは、同時に抑うつ的になっている可能性が高いと推察できる。抑うつの主症状は、気分の落ち込みと意欲の低下であるが、子どもの場合は抑うつに伴って気分の落ち込みの代わりにイライラした気分が現れることも多く（傳田，2004）、抑うつ度の高い児童は他者に対する攻撃性が高い傾向があることが見出されている（武田（六角），2000）。従って、自尊感情が低く、状態像としては意欲に欠けていたり攻撃的だったりする子どもを認めた場合、その子どもを短絡的に“やる気がない”とか“わがまま”と決め付け、自尊感情や意欲を高めるために励ましたり頑張らせたり、あるいは一方的に叱責したりするのは不適切であると考える。なぜなら、子どもの行動の背景に抑うつの問題ある場合、励ましたり頑張らせたり、一方的に叱責したりすることは、抑うつの症状を悪化させる危険性が高いからである。先入観にとらわれず、子どもの行動の背景に抑うつなどの精神病理的な問題がないかを見極めることが重要だと考える。

3. 知的発達のバランス

WISC-Ⅲによって評価した山村留学生の全検査IQは平均103.88（88-117）で知的な問題を有する子どもは認めなかった。知的発達のバランスについては、言語性IQと動作性IQの間に5%水準で有意差のある子どもが16名中4名（25％）認められ、15%水準を含めると、言語性IQと動作性IQのバランスに偏りのある可能性を認める子どもは16名中8名（50％）の高率であった。この結果だけから、山村留学する子どもの多くに発達的な問題があるとすることはできない。しかし、発達のバランスに偏りがあるため、不器用であったり思っていることを言葉でうまく伝えられなかったりして、自己価値の低下や抑うつ傾向を来たしやすい子どもが多く留学している可能性があると考えた。また言語性IQと動作性IQの間に有意差がない場合でも、下位検査の中に目立ってスコアの高い項目や低い項目が存在するケースが認められ、学習や日常生活適応に丁寧な目配りが必要であると考えた。以上の結果は、現在の山村留学においては、発達を視野に入れた評価をする必要のある子どもが増えている可能性が高いことを示しており、平成21年度の山村留学ネットワーク研修会で行われた、「発達面に偏りを持つ子どもが山村留学するケースが全国的に増える傾向にある」とする報告をある程度裏付けるものだと考えた。

抑うつ傾向との関係では、言語性IQと動作性IQの間に15％水準で有意差のある子ども4名のうち3名が、DSRS-Cによる評価でcutoff score（16点）を超えており抑うつ群と判断された。このことは、抑うつ傾向と子ども本人が持っている発達的バランスとの間に何らかの関連があることを示唆している。一方、言語性IQと動作性IQの間に5%水準で有意差のある子どもでは、cutoff scoreを超える抑うつ傾向は認められなかった。このことから抑うつ傾向の評価だけでは、子どもの内的状態や適応状態を十分に捉えられない可能性があると考えた。山村留学という環境の中では、行動観察を重視しつつ、無理なく取り入れることのできる評価尺度を活用して、抑うつ傾向、自己評価、日常的な学習や生活適応など多面的な視点で子どもの状態を把握し、適切なサポートにつなげていくことが必要だと考えた。

Ⅴ．まとめ・今後の課題

山村留学は学校教育と密接に関連しながらも、学校教育の制約とは異なった地域の枠組みのなかで行われる営みである。川前・玉井（1998）が「地域住民の理解や協力が得られなければ山村留学の積極的な展開は

望めない」と指摘するように、山村留学は実施する地域の歴史的・地理的特性や地域住民の思いに応じて多様な形態をとり得るものと考えられる。一方、子どもが心身を育む環境を提供するという意味では、あらゆる山村留学が『子どもの教育』という重い責任を負った取り組みであることを確認しておかなければならない。

私たちは、山村留学を通して子どもが対人関係面で成長し（山下他，2008)、集団の中での適応度を増して行く（山下・木谷，2008）ケースを報告したが、山村留学を通して可能なこと、山村留学に欠けていることを実証的に検証し、子どもたちによりよい環境と体験を提供するために生かしていくことは、山村留学が『子どもの教育』という重い責任を果たす上で、今後ますます重要になってくると考えている。

本研究は、山村留学する子どもの中に、平均的な同年齢集団と比較して、自尊感情が低く抑うつ度が高い子どもが多く含まれていることを示し、発達的な偏りを背景にもつ子どもが本人の特性に合わない教育・養育環境の中で自尊感情の低下や抑うつ傾向を来たして山村留学している可能性に言及した。このような子どもに、対人関係や学習面を中心に、本人の特性にあった適切なサポートを提供する体制を整えることが、山村留学の実施主体には求められているといえる。そのためには、地元小・中学校との連携を深めるとともに、医学や心理学の立場から適切な助言を行うことができる専門家と連携することも考慮する必要があると考える。

今後は、山村留学生の心理・発達的特性を継続的に把握するとともに、山村留学体験がどのような効果をもたらすかを、1人1人の子どもの特性を考慮しながら検討することが必要である。そのことを通して、山村留学の可能性と限界について明らかにしていくことが、山村留学がどのような外的機関・情報・人材と連携することでより効果的に機能できるかを明らかにし、山村留学をより充実したものにするうえで欠かせないと考える。

文献

東洋（1994）：日本人のしつけと教育. 東京大学出版会.

中央教育審議会（1998）：「新しい時代を開く心を育てるために」－次世代を育てる心を失う危機－（中央教育審議会（答申）平成10年6月30日）. 文部科学省HP（2009年12月5日検索）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/980601.htm#1

傳田健三（2004）：子どものうつ　心の叫び. 講談社.

傳田健三・賀古勇輝・佐々木幸哉・伊藤耕一・北川信樹・小山司（2004）：小・中学生の抑うつ状態に関する調査－Birleson自己記入式抑うつ評価尺度（DSRS-C）を用いて－. 児童青年精神医学とその近接領域，45（5）, 424-436.

Emery,R.E.,&O' Leary,K.D.（1982）：Children' s perception of marital discord and behavior problems of boys and girls. Journal of abnormal Child Psychology，10, 11-24.

遠藤由美（1999）：「自尊感情」を関係からとらえなおす. 実験社会心理学研究，39（2）, 150-167.

藤森秀子・眞榮城和美・八木下暁子・菅原ますみ（1998）：家族関係と子どもの発達（2）　家族関係と子どもの精神的健康について. 日本心理学会第62回大会発表論文集，8-10.

Holmes,T.H.&Rahe,R.H.（1967）：" The Social Readjustment Rating Scale". Journal of Psychosomatic Research，11, 213-218.

James,W.（1890）：The Princeple of Psychology. New York:Holt.

川前あゆみ（1998）：山村留学研究の到達点と今後の課題　－諸階層による山村留学の評価と矛盾の克服意識を通じて－. 社会教育研究，17, 61-73.

川前あゆみ・玉井康之（1997）：子どもから見た山村留学の評価と体験学習が果たす役割　－北海道Ｓ町を事例として. 釧路論集，29, 271-285.

川前あゆみ・玉井康之（1998）：受け入れ住民・里親から見た山村留学の効果と今後の課題　－北海道S町を事例として－. 僻地教育研究，52, 23-34.

Lazarus,R.S.&Folkman,S.（1984）：Stress, appraisal, and coping. New York:Springer.

文部科学省（2002）：「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」の結果について. 教育と医学，51（3），285-290.

村田豊久、清水亜紀、森陽次郎、大島祥子（1996）：学校における子どものうつ病－Birlesonの小児期うつ病スケールからの検討. 最新精神医学，1, 131-138.

武田（六角）洋子（2000）：児童期抑うつの特徴に関する一考察:攻撃性をてがかりに. 発達心理学研究，11（1）, 1-11.

中山奈央・田中真理（2007）：児童の自身が思う自己評価及び他者に映る自己評価が自尊感情に与える影響．教育ネットワークセンター年報，7, 45-57.
桜井茂男（1992）：小学校高学年における自己意識の検討．実験社会心理学研究，32（1）, 85-94.
佐藤寛・新井邦二郎（2003）：児童の不安症状と抑うつ症状に及ぼす学校ストレッサーの効果．発達臨床心理学研究，15, 37-43.
菅原ますみ（1997）：養育者の精神的健康と子どものパーソナリティーの発達:母親の抑うつに関して．性格心理学研究，5（1）, 38-55.
玉井康之・川前あゆみ（1998）：山村留学修了生の保護者の意識とへき地小規模校の役割．北海道教育大学紀要（教育科学編），49（1）, 33-48.
山下稔哉・木谷秀勝（2008）：山村留学から学ぶ子どもの精神的健康．第49回日本児童青年精神医学会総会抄録集，353.
山下稔哉・仲程誠・佐古三代治・木谷秀勝（2007）：“田舎”体験と子どもの精神的自立－山口県岩国市本郷における山村留学の20年を通して－.山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，23, 133-142.
山下稔哉・仲程誠・佐古三代治・木谷秀勝（2008）：対人関係の視点からみた山村留学生の“心の成長”－写真投影法による分析から－.山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，25, 399-411.
財団法人育てる会（2006）：全国の山村留学実態調査報告書　山村留学30年間のあゆみと未来展望・平成17年度の全国の山村留学実施状況.